

幼児への創造的身体表現の指導法 I

絵本の読み聞かせと音楽の有無による身体表現比較

○高野牧子(山梨県立女子短大) 小田ひとみ(湘北短期大学)

1. はじめに

身体表現は、自分で見たこと、感じたこと、考えたことなど、自分のイメージを動きで自由に表現することであり、子どもの心に内在するイメージを自分のからだの動きによって外在化することである。従って、一人一人の個性の発現であると考えられる。

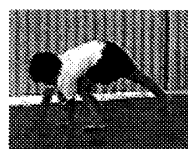
子どもの精神発達における運動の重要性を説くワロン(H. Wallon)は、2～4歳で「象徴機能が出現し、(中略)象徴遊び(あるいは想像遊び)とか、遅延模倣、また内化された模倣と考えられる心的イメージなどもこの時期はじまる」と述べている。¹⁾しかし西らによれば、5歳児で「うさぎ」を表現した場合、9割を越す幼児が「両足で跳ぶ」定型的な身体表現を行なうことを報告している。²⁾この結果より、園での身体表現活動が個性化への活動ではなく、定型的な身体表現の指導傾向が強いことが推測される。個性の発現としての身体表現を促す為に、幼児一人一人のイメージによる「動き」を出発点にした創造的身体表現の指導のあり方が求められる。そこで本研究ではイメージを想起させる方法として、子どもたちが同時に体験でき、園で日常的に行える絵本の読み聞かせの有効性と音楽が身体表現に及ぼす影響を検証する。

2. 研究方法

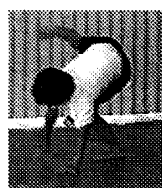
「絵本『ダンボ』になろう」を同一課題とし、筆者自身が指導者になり、子どもを指導し、収録したVTRより、幼児の身体表現活動を比較分析していく。A群は、最初の導入で言葉かけによって絵本の内容である「ダンボは耳の大きな象である」と「大きな耳で空が飛べる」の2点を確認し、身体表現を行なった。B群は、絵本『ダンボ』の読み聞かせを行なってから、言葉かけでA群と同様の内容を確認し、身体表現を行なった。また、両群共に前半は指導者の動きと言葉かけで活動し、後半は音楽もこれに加え、音楽の影響も考察していく。

＜指導観察日＞ 平成10年9月10日

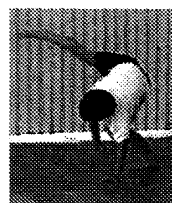
写真1 ダンボが歩く (音無し) 30 ㍲/sec



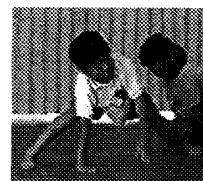
1 ㍲



12 ㍲



15 ㍲



36 ㍲

＜場所＞

私立F幼稚園

＜対象＞

年長児

A群 絵本を読まない 32名(男児16名/女児16名)

B群 絵本を読む 32名(男児16名/女児16名)

筆者が指導者となり、6月より3回ずつ指導し、子どもたちが身体表現活動にも慣れ、指導者との信頼関係も得て、子どもたちが通常の保育時と変わり無く活動していることを担任から確認し、指導観察に及んだ。

＜題材とねらい＞ 題材は、絵本『ダンボ』とした。大きな耳で空が飛べる象のダンボの話は子どもにも比較的よく知られており、話の内容から象の重さ、風船の軽さ、飛ぶ表現の高低など、対比的な動きの質を経験できる題材であると判断し、選択した。さらに象の定型的表現方法として、片腕を前に伸ばし、象の鼻に見立て、振りながら歩く表現方法が一般的であるが、この定型的表現以外の個性的な身体表現の創造を指導のねらいとした。

＜音楽＞ ヤマハ音楽教育システムの曲より、歌詞のない下記の2曲を使用し、①②①の順に編集した。

①ぞう、外国曲(1分26秒)

②のんきなぞうさん、平部やよい・曲(52秒)

3. 結果及び考察

(1) 絵本の読み聞かせの有無による身体表現の差

「ダンボが歩く」「象の風船」「ダンボが飛ぶ」の3課題、全ての条件で、前述の定型的な象の表現は自発的には出現しなかった。また、子どもたちの多くは、指導者の動きを模倣した身体表現であったが、子どもたち自らが創造した身体表現も行われた。そこで、子どもたちが創造した身体表現を、課題毎にAB両群の音楽が無い場合とある場合の4条件について、使用している身体部位と動きの種類からみていく。

① 「ダンボが歩く」

A群で音楽がない場合、「しゃがみ歩く」表現しか確認でき

なかった。音楽がある場合、「片足立ちになり、両腕を静かに羽ばたかせる」S子が独創的な表現を見せたが、多くは、音楽にあわせ、「両腕を水平に伸ばし走る」表現であった。B群では音楽がない場合でも5種類の表現が確認できた。特に、A夫は「大股の四つ這いで左右交互に手足を高く上げ、大きく空中に弧を描いてドンと床につける表現」(写真1)であり、象の重さがしっかり感じられる豊かで独創的な表現である。

②象の風船

A群の音楽が無い場合では、「背伸びして両腕を大きく広げる」「広げたまま歩く」という風船が膨らんだ様子を表わしたもののほか、2人から5人まで友達同士で手をつないだり、円になってまわったりした。音楽がある場合も動きの多様化はなく、T子が「腕を横に広げたまま、片足で回転して移動する」表現を唯一確認できた。

B群の音楽がない場合には、風船が膨らむ様子はA群と同様に両腕を広げて背伸びした。また、R夫が風船を「パン」と割るアイディアを出し、指導者が活動に取り入れた為、「両手をパチンと合わせる」「床まで転がる」といった風船が割れる表現や「指を突き刺す」「腕を刀のように突き刺しながら歩く」という風船を壊す表現も現れた。子どもからのアイディアが活動に取り込まれ、生き生きとした楽しい活動になっている。音楽がある場合、リズムとメロディに合わせ、「両腕を横に広げたまま背伸びで歩き」、風船の軽く、柔らかな質感は全員がよく表現している。しかし、風船が割れる表現は出現しなかった。

③ダンボが飛ぶ

A群の音楽がない場合には、「両腕を水平に伸ばしたまま、しゃがんで走る」という高さの変化と、「自分の耳を横に引っ張って歩く」表現が確認できた。音楽がある場合には女の子の友達同士で「三人組の内向き円で垂直に跳んでから、列になり、手先を上下しながら走る」という表現があった。

B群では音楽がない場合には、「両腕で羽ばたきながら、スキップ」や「片足立ちで、両腕で羽ばたく」などがあり、音楽がある場合には、「両腕を水平に伸ばしたまま、前後に振り、片足も伸ばしたまま横へ上げ下ろしする」など動かす身体部位が2ヶ所以上の複合的な動きがあった。また「しゃがんだままジャンプ」や「ジャンプしながら半回転」という技への挑戦が見られた。さらに「二人、三人で走る」など友達と関係しあう表現が増えている。

(2) 音楽の有無による身体表現の差

音楽の有無による個人の動きの変容を、B群のT男の「ダンボが飛ぶ」表現をとりあげ、身体部位と動きの空間性・時間性・力性から動きを分析する。

①身体部位

音楽がない場合には、両腕の羽ばたき動作と歩行であった。

音楽がある場合には、腰の屈曲による前傾姿勢が起り、体幹の表現も生まれ、手首を屈曲させ、足の爪先まで伸ばし、長い鼻を意識して、口をとがらせている。このように身体の細部まで意識して表現している。

②動きの空間性

レベルは、音楽がない場合には直立からほぼ変化しない。音楽がある場合には、小さくしゃがんだ状態から、走りながら、次第に中腰になり、再びしゃがんでいく。低くからやや高く、そして低くと漸進的に変化している。両腕の経路は、音楽が無い場合には体側でわずかに上下させる弧を反復する経路であったが、音楽がある場合は、両手を胸の前に組んでから、後方へ腕を伸ばし、背後で上下させ、体側へ降ろしてくる経路を描き、変化に富んだ空間性であった。

③動きの時間性(30コマ/sec)

音楽が無い場合には、1歩が約10コマであったのに対し、音楽がある場合には約5コマと倍の速さになり、とても細かく刻みながら爪先で走り、スピード感が増している。

④動きの力性

音楽が無い場合には、力性の特徴はみられない。音楽がある場合には、爪先で走ることで軽さを感じ、小さくなる時には摺り足となり、重さが巧みに表現されている。

これらの変容が単に音楽の影響か、2回繰り返したことで表現が深まったのか、どちらかに断定できるものではない。しかし、T男のように自己の内面にイメージが豊かに形成された場合、音楽は表現を一層豊かにする相乗効果が期待できると思われる。

4. まとめ

絵本を読まなかったA群は指導者が行なった身体表現の模倣が多く、動きに多様性がなかった。また、音楽がある場合にも動きの多様性は、時間経過とともに減少し、音楽による身体表現の活性化は殆どなかった。これに対し、絵本を読んだB群は、子ども達が独自に動きを創造し、多様性があった。特に音楽がある場合に、より細部にわたって身体部位を使い、動きの時間性、空間性、力性についても変化に富んだ豊かな身体表現事例を示した。従って、絵本の読み聞かせは、明確なイメージを子どもの中に与え、子どもがイメージを想起し、多様な身体表現を創造するのに有効な援助であったと考えられる。また音楽は十分なイメージ想起がある場合に、多様で変化に富んだ身体表現を促すと思われる。

引用文献

- 1) ワロン、浜田寿美男訳(1983) 身体・自我・社会、ミネルヴァ書房、p.253
- 2) 西洋子、本山益子(1998) 幼児期の身体表現の特性 I、保育学研究、第6巻2号、pp.25-37